Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

P 82

人間らしく生きるための研究（３）

福本 俊・泉 亜由美・小林 巳紗　星 道子・福山 多江子
（日本女子大学）　（関東短期大学）

【問題】この研究は実は日本の男性の生き方を問う研究である．過去，研究（１）（２）をそれぞれ日本教育心理学会大会（第４５回２００３年）日本心理学会大会（第６７回２００３年）に発表している．本研究を通して呼びかけたい点は，特に男性の暮らし方における「幼い頃からの友人関係の不可欠性」である．全てを犠牲にして生産活動に携わった男性たちが定年後に思い知らされるのは自らの交際範囲の乏しさである．引退後の暮らしでは生産年齢時代の同僚との結び付きは希薄になり，生産活動を支えていたスキルが充分に発揮されるとは限らない．このように生産活動と引き換えにした代償の大きさを知らされるとするならば，それは，労働からの疎外と言わざるを得ないであろう．男女共同参画時代と言われる．しかし，多くの女性が安心して産み・育てながら働ける状況には程遠い状態である．その原因の大きな１つが男性の自覚の無さである．例えば，男性の子育て参加の必要性は熱心に言われているが，当の男性が乗り気でない．職場に育児休業制度があるが，父親の休業取得率は極めて小さい（男性０．４２％：’９９年度厚生労働省）．育児休業制度がとれるほど時間的余裕がない事も確かであろうが，低取得率には「なぜ男性が」と言う風潮も一役買っていると言われている．これは，現在の男性たちに「子育てなどは女・子供のすること」との観念が幼いときから植え付けられて来た事を意味している．実際職場では，同僚が育児休業を取得したとき「彼は（出世競争から）下りた」と考える風土も多くあると聞く．この事は，保育職・看護職に就く男性が未だ未だ少ないことにも如実に現れている．待遇が男性の多い職種に比べて劣っていることも一役買っており，これらの仕事は「女・子供」向けだとの意識が働いている．もしも男性がより自発的に育児休業をとることができたならばどうであろうか．確かなことは，その人は育児休業をとらなかった場合よりも幾倍も多くの事柄と人間関係とを経験するに至るであろう．現在の母親達がそうであるように．

【目的】成人期から老年期にある人々の，幼少期から現在までの①友人関係及び暮らし全般についての評価．②現在までの暮らしで大切にして来たもの・こと．③引退後の２０数年間の暮らしの中で大切にしたいもの・ことについて，明らかにする．

【方法】１．対象者：札幌市，石川県，群馬県，愛知県，東京都に在住の，学生，社会人他．男性，中間性，女性．約７００名．年齢は１８歳から９０歳に亙る．
２．質問紙調査：”一線を退いた後の２０年間の生き方”を中心に問う質問紙．幼少期から成人期の友人関係についての評価．友人関係・家族関係．現在の同性・異性の友人数とその評価．これまでの生活で大切にして来た点．一線を退いた後の２０年間の人生設計（多肢選択法）．
３．調査年月：２００２年１１月から２００３年３月．

【結果・考察】Ⅰ．各項目の結果：数字は男性・女性の順である．（男・女約３００名のデータである）
０１．就学前友人関係：4.25,4.37
０２．就学前得点：78.39,83.31（有意差あり）
０３．小学校友人関係：4.17,4.04
０４．小学校得点:76.15,75.59
０５．中学校友人関係：4.00,3.94
０６．中学校得点:72.66,73.88
０７．高校友人関係：3.90,4.24（有意差あり）
０８．高校得点：73.37,81.16（有意差あり）
０９．青年友人関係：4.11,4.30（有意差あり）
１０．青年得点：78.49,82.16（有意差あり）
１１．現在友人数11.19,9.00（有意差あり）
１２．現在友人数評価：5.64,5.78
１３．現在友人関係評価：6.02,6.01
１４．現在異性友人数：4.15,3.84
１５．現在異性友人数評価：4.65,5.07(有意差あり)
１６．現在異性関係評価:5.03,5.36（有意傾向あり）
１７．カラオケ参加：1.93,1.89
１８．大切にして来たことベスト３：友人関係〉優しさなど人としての心〉自分らしくあること（男女同一），
１９．将来の暮らし方ベスト３：特定のパートナーと暮らす〉趣味を活かす〉大勢の友人たちと楽しみながら暮らす，特定のパートと暮らす〉大勢の友人たちと楽しみながら暮らす〉趣味を生かす
２０．就学前友人関係との相関関係：小学校から青年期の友人関係と有意な相関，小学校から高校及び現在の友人関係と有意な相関．その他，就学前得点とは小

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

学校から青年期まで有意な相関が認められた．

Ⅱ．各時期での友人関係評価間の相関関係：１５８名（男性５８名，女性１００名）．３０歳～９０歳スピアマンの順位相関係数から，ほぼ以下の結果が見られる．本質問紙で取り上げている人数や評価は，①就学前友人関係，②就学前生活得点，③小学校友人関係，④小学校生活得点，⑤中学校友人関係，⑥中学校生活得点，⑦高校友人関係，⑧高校生活得点，⑨青年期友人関係，⑩青年期生活得点など１９項目に上る．女性が①就学前友人関係の評価が成人後の同性友人関係の評価を除いて他の全ての時期・評価と有意な相関関係を示しているのに対して，男性では成人後の時期・項目とは有意な相関関係にはないと言う点が顕著である．更に，女性においては，仕事以外での友人関係が他の時期・評価と有意な相関関係を示している．女性特有の友人関係の広がりと考えられる．

Ⅲ．生きるうえでの指針などに関して

１．これまで大切にして来た事柄など（問Ⅲ－３）男女とも「優しさ・思い遣りなどの，人としての心」「自分らしくあること」,「自分の責任は自分でとること」が最も優先された項目の中の上位３位であった．男性は「信念」が同点３位であった．

２．社会的に一線を退いた後の暮らし方（希望）について（問Ⅳ－３）：男女とも最も優先された項目の中で１位と２位は「特定のパートナーと二人で一緒に過ごす（旅行・食べ歩きなど）」，「趣味を生かして過ごす」であった．３位には男性「自分の追究したいテーマ（研究・創作活動・○○道など）に取り組む」(5.2%)，女性は「大勢の友人たちと楽しみながら過ごす」が同点２位であった(18.6%)．第１位の数値が男性が１０％程大きいことと，第３位の内容が個人に向かうのか，友人との輪に向かうのかで大きく異なっている．

Ⅳ．引退後の望ましい暮らし方－２：合計７００名の引退後の望ましい暮らし方のベスト３を年齢別・性別に整理した．対象者の年齢別・性別の内訳が表１である．表２に第１位～第３位に選ばれた項目を示した．これらの項目は次のような得点化によっている．第１位には３，第２位には２，第３位には１を選択頻度に乗じる．算出された得点を合計して順位をつけベスト３を決定した．表から読み取れる事は，ほぼ次のとおりである．①全ての年齢層を通して，対人関係に属する内容が最重要視されている事．②女性は男性に比べて対人関係に属するものを重視していること．③７０歳代以降の女性は，男性よりも個人に属するものに生きたいと考えていること．自然に親しむに次いで趣味・特定のパートナーと一緒である．

表１：対象者数・性別・年齢

性・年齢	～19歳	20～29	30～39	40～49	50～59	60～69	70～	総 計
男　性	63	137	11	16	23	12	6	268
女　性	178	112	30	52	45	8	7	432
合　計	241	249	41	68	68	20	13	700

表２：引退後の望ましい暮らし方　ベスト３

～20歳	男子	特定のパートナーと一緒に過ごす＞趣味を生かす＞大勢の友人と過ごす
	女子	特定のパートナーと一緒に過ごす＞大勢の友人と過ごす＞趣味を生かす
20～29歳	男子	特定のパートナーと一緒に過ごす＞趣味を生かす＞大勢の友人と過ごす
	女子	特定のパートナーと一緒に過ごす＞大勢の友人と過ごす＞趣味を生かす
30～39歳	男子	特定のパートナーと一緒に過ごす＞趣味を生かす＞追究したいテーマ
	女子	特定のパートナーと一緒に過ごす＞趣味を生かす＞大勢の友人と過ごす
40～49歳	男子	特定のパートナーと一緒に過ごす＞一人静かに＝自然に親しむ
	女子	特定のパートナーと一緒に過ごす＞趣味を生かす＞大勢の友人と過ごす
50～59歳	男子	特定のパートナーと一緒に過ごす＞一人静かに＝自然に親しむ
	女子	特定のパートナーと一緒に過ごす＞趣味を生かす＞大勢の友人と過ごす
60～69歳	男子	特定のパートナーと一緒に過ごす＞趣味を生かす＞追究したいテーマ
	女子	特定のパートナーと一緒に過ごす＝趣味を生かす＞自然に親しむ
70歳～	男子	特定のパートナーと一緒に過ごす＞趣味を生かす＞自然に親しむ
	女子	自然に親しむ＞特定のパートナーと一緒に過ごす＝趣味を生かす

NII-Electronic Library Service